

論文の内容の要旨

論文題目 カントにおける倫理と政治—根元悪・市民社会・共和主義—

氏名 齋藤 拓也

自然状態から政治状態への移行を何らかの契約行為によって成し遂げる「社会契約」論は、近代の政治思想の中でも最も重要なモデルの一つである。このモデルには、人間が自ら進んでありうべき社会の創設に関与するという積極的な意味においてだけではなく、人間が望ましい社会を自らの手であらためて作り出さなければならないような否定されるべき状況を作り出しているという消極的な意味においても、自らが何らかの仕方で責任を負わなければならないような意志と自由の問題が関わっている。もはや徳があると前提することができない人間たちが、それにもかかわらず、いかにして社会を形成し、共同の生を営むことができるのかが問われるのである。カントの場合には「悪魔の人民でさえ国家設立の問題は解決可能である」というテーゼにおいて問題が先鋭化されるが、しかし規範的な観点が政治社会創設の問いから失われるわけではなく、カントは社会契約の理念を手放さずに理想の政治体制を論じるのである。

このようなカントの立場を理解するために、本研究ではカントにおける政治の問題を考察する前に、カントの道徳哲学に分け入ることを試みた。カントは法の問題と倫理の問題を分離しているが、「自然状態」という問題設定において、分離された法の問題と倫理の問題がいわば絡み合っているからである。この絡み合いを解きほぐしてカントの政治思想における問題の所在を明らかにするためには、倫理、そしてその背後にある道徳の問題をまず見つめ直さなければならないのである。

そこで第一部では、カント道徳哲学における「意志の自律」の思想を分節化し、格率倫理学の観

点から、徳を幸福の最上の制約とする「思考様式」と、それを実践する「心術」として把握しなおすことから議論を始めた。

第一章では、「意志の自律」の思想が客観的な道徳法則と主観的な格率の関係という観点から分析される。この思想のもとでは、有限な理性的存在者としての人間は、一方で道徳法則から逃れることができないにもかかわらず、他方では幸福の追求を断念することもできないがゆえに、徳と幸福がともに実現すること（最高善）を求めて宗教へと至る。そしてこのとき人間は神の意志の「神聖さ」との比較から限界を確定された「知恵」の立場を実践的理念として、自らの格率を真摯に吟味すべきなのである。

第二章では、人間が自らの格率を吟味する様態そのものをカントがどのように理解しているかを明らかにする。カントによれば、人間は善への素質をもつにもかかわらず、悪をなしてしまう存在である。これは、人間が道徳法則を意識するにもかかわらず、道徳的動機よりも感性的動機を優先させてしまう転倒した「思考様式」をもつことを意味する。そして、たんなる意志の弱さに還元できない思考様式の転倒から根本的に脱出すること、すなわち「心術の革命」が人間の課題であることが明らかになる。

第三章では、この課題が社会的な次元での解決をも要求するものであることが説明される。悪として説明される事態の責任は根本的には個々の主体にある。ただし、悪は人間の集合的＝社会的な生活において拡大する問題でもある。そこで悪は個人の努力で克服されるべきであるだけでなく、つねに他者との関係においても解決が図られるべき問題として把握されることになる。このように社会的な次元で理解された悪は、自然状態の表象と結びつけられ、市民社会によって克服されるべきものとなる。こうして、権利が侵害された状態である「法律的自然状態」から、道徳性が損なわれた状態である「倫理的自然状態」が区別して把握され、それぞれに異なる解決策が示されることになる。カントの政治思想では、何よりも権利を平等に保障する社会の形成が課題であることが明らかになる。

第二部では、一方で「倫理的自然状態」が「倫理的市民社会」によって、他方では「法律的自然状態」が「法律的市民社会」によって克服されるべきであること、そしてそのためには啓蒙が不可欠であることが明らかにされる。

まず、第四章では「倫理的市民社会」は善き生き方を目指して純粋理性宗教を信仰する人々の社会、「法律的市民社会」は権利を平等に保障された人々の社会でなければならないことが確認される。しかし、カントによれば人々が形成している「国家」と「教会」はその原理においても制度においても、そのような社会にはなっていない。そこで、現存する教会と国家はともに漸次的に改革されるべき制度として把握しなおされる。

第五章では、社会があることによってはじめて人々が相互に理論的・実践的な事柄について自ら

の見解を示し、相互に誤謬を取り除く漸進的なプロセスとしての「啓蒙」が可能になることを解明する。このプロセスへの参加をつうじて人間は教会と国家の理念を明らかにし、さらには「思考様式」を獲得し、知恵の立場への道を自ら開くことができるのである。

第六章においては、啓蒙が先入見の問題をめぐって統治の権力との緊張関係を余儀なくされるという 18 世紀後半のドイツ語圏の状況がカントに即して論じられる。カントは理性を適切に使用することが啓蒙を進展させる内的な条件であると同時に外的な条件でもあることを強調する。理性がその限界を超えて無法則的に使用されると、思考そのものが破綻するのみならず、政治権力によって思考の自由もまた閉ざされることになってしまうのである。

この啓蒙のプロセスは政治的な意味での「市民社会」において倫理的によりよいものを目指して進められる。このためには、政治的な意味での公共体、国家それ自体が啓蒙を可能にし、権利としての自由を保障する空間にならなければならない。このことを確認したうえで、第三部ではカントの共和主義の論理を析出する。

第七章では、カントにとって、あるべき政治は根源的契約の理念にもとづく共和国においてのみ可能であることを確認する。人民主権の原理にもとづいて政治的な自律を達成しうる共和国は理念としての国家、「叡智的共和国 (respublica noumenon)」である。そして、この理念を「現象的共和国 (respublica phaenomenon)」において追求するためには、代表制としての代議制を中心とした権力を適切に行使するための制度的条件が必要である。

第八章では、カントの政治思想における共和国の形成という課題が取り上げられる。カントによれば、国家は悪魔の人民によってさえ創設されうる。そして、人間たちの間では大抵の場合国家は暴力によって設立され、専制的に支配される。このとき、カントは専制を共和制へと改革することに課題を設定する。この改革の過程では「人民の権利の唯一の守護神」と呼ばれる「言論の自由」だけではなく、政治のあり方を批判的に吟味するために「公開性の原理」も重要な意味をもつ。「公法の超越論的概念」と呼ばれる「公開性の原理」は君主の統治から誤謬を取り除き、政治が思慮の原則と情念に流されることを防ぐために不可欠の条件である。

第九章では、共和国への改革の過程が、啓蒙において起こりうる「思考様式」の獲得と重ねあわせて考えることができるものであることを示す。自分が生まれ落ちた国家が根源的契約にもとづく共和国であることを求めるとき、思考様式は「祖国的」とするとカントは述べているからである。このとき、「思考様式 (Denkungsart)」は根源的契約の理念と関連づけられ、心情としての「感じ方 (Sinnesart)」と対置されるものと捉えることができる。カントにおける「パトリオティズム」は「思考様式」として選び取られ、獲得されるものなのである。

本研究では、自然状態（戦争状態）論におけるカントのルソー読解から共和制論まで解釈を進め

ることによって、カントの政治的公共体（国家）における人民主権の原理の重要性だけではなく、「言論の自由」および「公開性の原理」が有する構成的意義を明らかにした。共和国の理念へと現実を近づける政治的な試みの総体をカントの「共和主義（**Republikanismus**）」と呼ぶならば、その中には現存する国家において共和主義の実現を試みる「共和主義化（**Republikanisierung**）」の契機が入り込むことになる。従来、「共和主義化」は君主による専制から共和制への自己改革のプロセスという観点から説明されてきた。しかし、「言論の自由」は啓蒙を可能にする条件として「共和主義化」にとって不可欠の権利であり、「公開性の原理」は政治を批判的に吟味することを可能にする。諸権力の抑制と均衡よりも人民主権の適切な行使に政治的自律を見出すカントの共和制においてこれらをもつ構成的意義は過小評価されてはならないだろう。これらの条件をあわせてみたとき、「共和主義化」は、君主による自己改革に限定されるのではなく、人民が立法権（主権）を獲得し、あるべき権力の諸関係を実現するさまざまな試みの総体として提示しうるものであることが明らかになる。「共和主義化」はもっぱら被治者として位置づけられていた人民が根源的契約の理念を尊重し、みずから正当な立法へと習熟する過程なのである。

カントの政治思想のアクチュアリティを探究するなかで、人民主権の原理（または共同立法への参加という「政治的自由」）は、改革主義的解釈（**W・ケアスティング**、**C・ランガー**）においても、民主制理論（**I・マウス**）においても、共和主義的解釈（**P・ニーゼン**、**P・ホェルツィング**、**A・ピンツァーニ**）においても重視されている。しかしながら、カントのテキストには立法的主権の確立をつうじた「共和国」の実現への関心だけではなく、立法の正当性と統治の正当性への鋭い眼差しがあることが読み取られなければならないのである。